漢文の窓①

中国の寓話と故事成語

「寓話」と呼ばれるものは、他の物事にたとえてなんらかの教訓や観念を語ろうとする物語であり、世界各地で古くから作られてきたと考えられる。ヨーロッパでは、古代ギリシアのイソップ（アイソポス）が寓話の創始者とされている。この「イソップ寓話」（イソップ物語）は、その後世界中に広まった。アジアでは、インドの「ジャータカ」（本生譚）が有名である。これは、釈迦の前生の物語に託して教えを説いたもので、仏典の中にふくまれている場合が多い。こうした世界各地の「たとえ話」を、日本では二十世紀以後「寓話」と呼んでいる。

中国では、「寓話」という呼称よりも、「寓言」という呼び方の方が一般的だった。古代の思想家荘子（荘周）とその著とされる『荘子』について、司馬遷は『史記』荘周列伝で、「其著書十余万言、大抵率寓言也」（其の著書十余万言、大抵率ね寓言なり）と述べている。「荘子の十余万言の著書は、ほとんどみな寓言である」との意である。「寓言」と「寓話」は、ほぼ同じ意味であるが、教科書では、日本で一般的に用いられている「寓話」という呼称を用いている。

寓話は、広い意味ではたとえ話のことだが、動物や植物などに託して、分かりやすく教訓や処世法を語るところに特徴がある。イソップ物語を室町時代に日本語訳した『天草本伊曽保物語』「鹿と蒲萄のこと」の末尾に、「下心」として、「恩を仇を以て報ずれば、天罰逃れずとゆう義ぢゃ」とある。「下心」とは、隠された真意、たとえ話の教訓を意味する。このように、たとえ話の真意・教訓を明示することも古くからおこなわれた。

中国でも、一八四〇年代にイソップ物語が翻訳され、上海で『伊娑菩喩言』が刊行されたが、その「斧頭求柄」（斧の頭が柄を求める話）の最後に、「凡人必須＝各守＝其分一、切勿＝尺寸与レ人」（凡そ人は必ず須く各々其の分を守るべし、切に尺寸も人に与ふる勿かれ）と、教訓が示されている。「およそ人は必ずそれぞれ自分の持っている分（天与の持ち分）を守らなければならない、絶対にほんのわずかでも他人に与えてはいけない」との意で、教訓を明らかにしている。

中国では、ことに戦国時代に数多くの寓話（寓言）が生まれた。この時代、多くの思想家が自己の哲学・政策を主張し、それを各国の君主に説いてまわった。戦国時代は、一面で、遊説者の時代だったのである。彼らは自己の説を分かりやすく、説得力のあるものにするために、たくさんの寓話（寓言）を用いた。先に触れた『荘子』は、寓話によって哲学を語った典型的な例である。そして、そうした戦国時代の寓話の中から多くの故事成語が生まれ、今日まで伝わった。「蛇足」（『戦国策』）、「朝三暮四」（『列子』）は、その例である。もちろん寓話は後代にも作られた。また寓話以外の世界から生まれた故事成語もある。「断腸」（『世説新語』）は、そうした例である。これは後代に、小説から生まれた故事成語である。とはいえ、多くの故事成語が寓話と結びついて生まれてきたことは、後代においても変わらなかった。

（安藤　信廣）